
金と時間の天秤

En

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金と時間の天秤

【Nコード】

N1207BA

【作者名】

En

【あらすじ】

ホームセンターのアルバイトの青年がいる。

彼には夢も金も無いのに時間だけは無駄にあるのだが…？

『財布落としましたよ』

『財布落としましたよ』

金にはこんな言葉も言えなくなり程の力がある。

ホームセンターのアルバイトの夏川は身なりの良い老人が落とした財布の中を見て実感した。

中には福沢諭吉しかない。更にその人数もおかしい。これが十人くらいだったら平気で老人を呼び止めただろう。だが、その五倍以上ならどうだろう？ 『財布にはこんなに沢山の札が入るのか』、と関心するくらいなら？ 呼び止めはしまい。少なくとも彼はしなかった。

老人は自分の失敗に気付いていない。夜のホームセンターには人が殆どいなかった。誰も見ていない。

『こんなものはあの老人の財産の一部にすぎない。持っていてても問題は無いはずだ。』こんな事を本気で考える程に、金には、少なくとも今の夏川には、力があつた。

「おいおい… 六十七万八千円も入ってるよ…」
時間もまた強い力がある。

自宅のアパートで夏川は再び実感していた。

どんな事でも、罪悪感とは後から生じる物だ。

夏川には自分のした事が恐ろしくなっていた。

それは、『逮捕されるのでは？』という身体的な恐怖に『この財布があの人にとって大切な物だったのでは？』という想像も加わった強い後悔の感情に進化した。

明日、ホームセンターに行ったら、『落ちてました』と言って終わらせようと思った。

誰も自分の犯行を見ていない、という事は『自分は何も知らなかったし何もしていなかった』と言っても問題は無い。

夏川はそう思いながらも、財布を持っていくのも自分なのに指紋の始末をしている。

「おはようございます」

早朝のホームセンターに昨日の老人がいる。

「財布を取りに来たんですか？」

何も考えずに言っで、すぐに後悔した。これだと『財布の持ち主はあなただと知ってるし、財布自体も昨日の時点で見つかってあります』と言ってるのと同じだ。

「いや、昨日落としたのを拾って、呼び止めたんですけど気が付かなくて」

もうこの老人にさっさと財布を渡して、帰ってもらった方が良い。

夏川はしどろもどろになりながらも、財布の件についての言い訳を言う。

老人は終始ニコニコしていた。

夏川には『怒ってないかも』という希望が見えた。

「そんな筈はないでしょ」

老人は表情を変えずに返す。

「え？」

「だって、あの財布は僕がわざと落としたんだから。呼び止めたかどうか分からないわけ無いじゃないか」

老人は、やはりにこやかに言った。

「え…」

『この老人に嵌められたのか』と思った。
何の為に？

金持ちの老人の考えは分からない

この後口止め料を要求するのか？
それであれだけの金を貯めたのか？
「おめでとう！君は合格だ！」
「はい？」
「君は僕のテストに受かったんだよ」
金持ちの老人の考えは分らない。
改めてそう思った。

「合格？」
「そう！合格！」
不合格の間違いじゃないかと本気で思った。
そもそも夏川の行動は最初から最後まで道徳的に間違っている。
「けど俺、『財布落としましたよ』とも言わずに最初に中身を見た
し」

「なかなかどうしてそれが出来る若者がいなくてねえ！」
「いや、寧ろその方がいいでしょう！」
「僕は自分の為に何か出来る若者を探してるんだよ！」
「じゃあ『財布落としましたよ』と言わなかったのも、そのまま
持っていったのも？」

「そう！半分は中身を見て恐くなったのかすぐに僕を呼んでね」
「それが普通じゃ……」
「普通の善人が欲しいんじゃないんだ」
それでも一つおかしい所がある。

「……百歩譲ってそれを認めたとしても、俺は最終的にはこうして持
ってきてるじゃないですか。最後まで自分の為に何か出来てません
よ」

「それなんだよ」
老人は嬉しそうに解説する

「半分は僕の所に持つてくるんだけど、あとの半分はみんな自分の物にして終わり。お陰で何百万を無駄にしたか。僕は普通の善人は必要ないけど自分の行為に後悔もしない悪人にはそもそも用はないんだ。ちゃんと弱い所と強い所のある人が必要なんだよ」

「じゃあ、そろそろ本題に…」

この状態だと何も理解出来ないかもしれない。

「あ、ちよつと待つて…」

夏川にはどうしても聞きたいことがあった。

「何？」

「何でそんな人を探してたわけ？」

それだけでも分かれば、この状況に適応出来るかもしれない。

「僕に似てるから」

余計に混乱する羽目になるのだが。

「それじゃ何にも分かんないじゃ…」

「四の五の言うな！質問時間はもう終わり！今から本題に入る！」

結局何も分からないままにこうなった。

これからどうしたら良いだろう。

少なくとも抵抗するのは無駄な事だ。

この老人は何百という金を殆ど溝に捨ててる使い方を平気でする男なのだ。

ボディガード、或いは武器を持っているかもしれない。

もう後はこれ以上聞き逃さないようにするしかないのだろうか。

老人の話が始まる。

「見ての通り、僕はこんな年寄りだ。金はあるが、時間はもう殆ど無い。まだやりたい事もあるんだがね。ちなみに君はどうだい？」
夏川にとってはキツイ質問だった。

彼は大学も出たのに未だにアルバイトで生活している。

金があるわけが無いし、夢があるならそれをやってる筈だ。

「何であんたにそんな事言わなきゃなんないだよ!」

こう断るのも自然だろう。

夏川はそれを言いたくないのだから。だが、残念ながら敵のカードは多すぎた。

「言わないなら警察に通報するだけさ。君は僕の財布を盗んだんだから」

老人は既に笑顔ではない。

夏川には最初から選択肢は無い。

この男なら証人を二三人作る事も出来るだろう。

「…分かったよ!くそ…」

「さあ早く」

「…俺には、時間はあるけど、金も夢も無い」
言ってて悲しくなる。

老人は再び笑顔になる。

「だろう?さあここでビジネスの話だ」

「ビジネス?」

「そう!互いに足りなかったり持て余してる物があるだろう?それを交換しようじゃないか。つまり…」

「つまり?」

「『君の時間を僕に売ってくれ』ってことさ」

老人はやはり笑顔だ。

「いや何、本当は僕が自分でやりたい事だからね。これは万が一僕が自分で出来なかった時の保険だよ」

「それで、俺の寿命を縮めてあんたの延命を…」

夏川は混乱している。

自分でもわけの分からぬ事を言う。

「そんな事出来るわけ無いだろ！」

流石に老人も怒った。

「すいません…。じゃあ…時間を売るって？」

「要するに、僕がやりたい事を出来ずに死んだら、代わりにやってくれてことさ。契約書もあるから、はい」

老人はペンと契約書を渡してきた。

夏川はそれに必要な事を記す。

「そういえば…報酬は？」

夏川には大事な事だった。何せ時間を売るのだから。

「ハハハ！確かに。大事な事だよな。報酬は…これ」

老人は笑いながら、ポケットから何かを取り出す。

小切手だった。

「おい。金額が書いてねーぞ」

「好きな金額を書いて良いって事だよ！」

「嘘！？」

「本当」

信じられないがこの老人ならばあり得るかもしれない。

「すげえな…。よし！きつちり仕事するぜ！」

「いや、まだ仕事があるかもわからないからね」

「ああ、そうか」

「まあそういう事だから仕事はちゃんとやれよ。やらなきゃこの話は無かった事にする」

「分かりました！今の仕事をきつちりこなします」

「うん。じゃあまた…と言っても僕は会いたくないけど」

「あ…そっか」

考えてみれば次に会うときがあるならば確実に老人が死んだ時だ。

契約書には、老人の葬式に持ってくれば仕事をやる、と書いてある。

「まあいいや。じゃあ仕事頑張れよ」

そうして、夏川は老人と別れた。

夏川自身もう暫くはあの老人を見かける事は無いと思っていた。

次の日、新聞を見ながら夏川は新たな発見をした。

それは『その人に残された時間がどれくらいかを正確に知る者はいない』ということだ。

新聞にはあの老人の写真と、彼の遭遇した交通事故の詳細が載っていた。

「これで逆転だ」

「まさか の社長だったなんてな…」

とは家電やゲームを製造・販売している会社であり、日本では
の製品が最も多く流通している。

夏川も のゲーム機をひいきにしている。

「えーと…どこで葬式やるんだ…」

新聞には書いていない。ふと思い付き契約書を見る。

「やつぱり。ありましたよ」

夏川は嬉しそうに独り言を言う。

大金は『昨日の知り合いが亡くなってつらい』なんて感情も吹き飛ばす力がある。

「あなたは誰ですか」

葬式会場に入る前に女に呼び止められた。

「こういう事さ」

夏川は得意気に契約書を見せつける。

女は暫く無表情でそれを眺めていたが、すぐに表情が変わった。
悲しげな顔だ。

「やつぱり社長は…」

「どうしたんだよ？」

女は答えずに会場に向かった。残されたのは夏川だけだ。

「これが本物なら、社長は自分の死を予期していた可能性がありま
すね」

再び現れたさっきの女が言った。

また無表情に戻っている。

「予期？あれは事故だろ？」

夏川は驚いて言う。

「つまり、あれは事故じゃなく殺人だったって事か？」

夏川にはあの老人が殺される理由が分からなかった。

「恐らくは」

「何であの人が殺されないとならないんだ」

「経営方針の違いです」

「何それ？」

「社長はゲームを中心とした経営をしていましたが、今の株主の殆どは家電製品を中心とするのを目指していますから」

「そんな理由で！？」

夏川には信じられなかった。

「はい。それに最近の社長は殆ど仕事もしないでゲーディングをしたり、若者をからかったりして遊んでいましたから」

遊ばれた若者はここにいます。

「なるほど……」

「お分かり頂けましたか？」

「分かったような分からないような。ただ、社長は俺に何かをやつて欲しかったんだろ？それが社長の死の手がかりかも」

「恐らくは」

「よし！分かったあ！」

夏川が叫ぶ。

「俺が社長の仕事をきっちりこなして、その死の謎も解いてやるぜえ！」

「結構です」

女が答える。

「え？」

「我々はあなたを必要としていません。どうぞお引き取りを」

女はやはり、終始無表情だった。

「いやいや。俺は社長に頼まれたわけで」

「これだけ分かれば十分です。後は我々がなんとかします。あなたでは力不足です」

「はあ！？あんた何様のつもりだ！？」

夏川は自然と熱くなる。

「私は社長の秘書です。あの人の考えは私がよく知っています」
対して女は冷静だった。

「俺はあの人に直接頼まれたんだ！信頼されてんだよ！少なくとも、今の時点では俺の意志は社長の意志だ！」

「もういいですか？時間がもつたないので、失礼します」

女はさつさと葬式会場に戻って行った。

慌てて追いかけるが入り口で止められる。

もう、入れない。

「…はあ」

もうどうしようもない。

「何で仕事止めてきたんだよ…」

夏川は社長の死が明らかになってからすぐに仕事を止めていた。

『社長が死ぬまでは』今の仕事を続けなければならなかったが、社長が死ねば寧ろ仕事を止めた方が良く、報酬が無制限の仕事に集中出来るからだ。

そう考えての行動だったが、これが大失敗だった。
残されたのは契約書だけだ。

「…契約書？」

これがヒントかもしれない。

葬式会場だってこれに書いてあったのだ。逆転の可能性はもう、これにしかない。

果たして、それらしき物はあった。

これを武器に、もう一度対決だ。

「また来たんですか」

女は呆れて言った。

「まあね。ところで契約書はちゃんと読んだか？」

「…いえ。時間が有りませんでしたから」

夏川が笑いだした。

「何が可笑しいんですか！？」

「契約書はちゃんと読めよ。ほらここ、よく見てみ、『なお、私が死亡した場合、秘書を提供する事にする』だつてさ」

「な…」

「これで逆転だ」

「こんなのは無効です！契約書に私の意志の確認がありません！」

「だからよく読めつて。あんたのサインもあるぜ？」

確かに契約書には『春風 桜』というサインがある。

「こんなのは…ただの偽装です！」

「証拠は！？それが無いならあんたはこの契約書を認めて、サインをした事になるな！？」

「うう…」

「どうする？俺に仕事をくれるか？」

「…分かりましたよ。この内容なら私も手伝えるから、事件が解決するかもしれませんし…」

「しゃー！」

夏川はガッツポーズをして叫ぶ。

「元々一人でやるつもりだったし…」

「…え？何で？」

「恐らく、社長を殺したのは会社の幹部です。手伝ってくれる筈がありません。信頼出来る幹部に頼んで、私一人でやる事になったんです」

「あんたは何でやろうと思った？」

「…私は社長の経営方針もあの人の無駄使いも嫌いですけど…『あの』人は…嫌いじゃないから」

「…へー」

それ以外に言えない。『秘書と社長の禁断の恋』なんて言葉が浮かんだ。

「そこには何もありません！」

翌日、夏川は社長の家にいた。

社長は自分のやりたかった事を誰にも言わなかったらしい。だから、まずはここで手がかりを探すつもりだった。

「取り敢えず自己紹介でもしようぜ。春風桜さん？」
似合わない名前だ。

彼女のイメージは寧ろ冷たい冬ではないだろうか。

「…そうですね。春風桜です。よろしく」

「夏川太陽。のゲームが好きです。よろしく」

そして、夏川は握手を求めたが無視された。

「社長のやりたかった事を知るには、社長と同じ事をやってみるのが一番いいだろ」

夏川が言ったのは二人が家の中を探して三十分してからだ。

「…根気無さすぎです」

「だって、この家広すぎんじゃない。こんなのどんだけ探してもわかんねえよ。家族もないみたいだし、一人暮らししてたのかよ」

「一人じゃないです。私も住んでました」

「…あんなたちどつという関係だったの？」

「社長とその秘書」

「性的な意味で？」

春風は目の前の小物を夏川に投げつける。頭に当たった。

「痛てえだろ！」

「あなたが馬鹿な事を言うからです！ 私たちには肉体関係はありません！」

「じゃあなんで住み込みなんか」

「社長は家事が出来ないから、私が手伝っていたんです!」

「メイドかよ…。つか社長の家族は?」

「三年前に交通事故で亡くなりました」

「…そっか」

何となくしんみりした。確か社長も交通事故で亡くなっていた。世の中から車が無くなればいいのに。

結局、春風は夏川の提案である、『社長と同じ事をする』に賛成した。

「確かにこの広い家の中で何か分からない物を探すのは厳しいですね」

「だろ? 流石は俺だな!」

「時間をもつたいないからどうでもいいことは言わないで下さい。前にも言いましたが、社長は最近仕事をしないでガーデニングをしてました」

「じゃあ、まずはそれだな」

外に出る。

広い庭には色とりどりの花が咲いている。

「綺麗だな」

「それだけです。食べられもしない無駄な存在です」

「春風さん? そう言う割には笑ってますよ?」

春風は慌てて口元を抑えた。顔は真っ赤だ。

「ハハッ! で? 社長はどうやってたの?」

「こっ…ホースで端から端まで水を…」

「それガーデニングかよ…」

言いながら端から端まで水をまく。

途中に何も無い所があったが気にしない。

「…！？ちよつと！？なにやってるんですか！？」

「え？」

「そこには何も無いでしょう！」

「…なんだそんな事か…」

「そんな事！？あんな無駄な事をして！？あなたは良いかもしれませんが、お金を払うのは私ですよ！？そういう無駄な事をして雑草が伸びて、花が全部枯れたら責任とれるんですか！？死んで償うんですか！？」

「ちよつと神経質なんじゃ…」

「社長と同じで無駄な事をして！」

「…ごめんなさい」

「何回注意しても止めてくれない！」

「…ん？」

「まるで嫌がらせ…ちよつと！聞いてるんですか！？」

「社長には何回も注意してたのか？」

「だから、そう言ってるでしょう！？」

「…ふーん」

「まだ話は終わって無いですよ！？」

「もういいだろ！？もうやらねえよ！」

「駄目です！」

「！？」

「確かあなたはゲームが好きなんですよね！？」

「まあ…」

「それも無駄！お金の無駄だし、時間の無駄！」

「話が変わってるぞ…」

「ゲームなんて作る意味が無いです！　は生活に役立つ家電だけ作つてればいいんです！」

「…そんな事言ったら人間の存在も無駄になるし、この時間も無駄

だぜ…」

「この時間はあなたの考えを正すという点で有益だし、全ての道具は人間の役に立つ為に作られたのだから人間の存在が無駄かどうかは関係無いです！ゲームなんて何の役にも立たない無駄な物です！」

不思議と、春風が熱くなるにつれて夏川は冷静になっていった。
「…ゲームはこの花と一緒にだろ。人間を楽しませる為にある。そういう意味じゃ有益だろ？」

春風は急に黙った。

「…ん？どうした？」

「社長と同じ事言ってる…」

「へえ」

夏川は社長に似ているから仕事を頼まれた。
案外、正しいのかもしれない。

夏川は自宅で、自分の考えを纏めていた。

最初にあつた時の事。

やりたくても出来ないかもしれない事。

花の存在意義。

ガーデニング時の嫌がらせ。

そして。

「…うん。多分こういう事だな」

全ては終わらない。

それでも、明日何かが変わる筈だ。

「いや、まだ受け取れない」

「社長のやりたかった事が分かった!？」

翌日、夏川と春風は再び社長の家に来ていた。

「うん。多分」

「あり得ません!あなたは昨日初めてここに来たんですよ?情報量が少な過ぎます!誰が社長を狙っていたかも分からないのに…」

「それなんだけどさ。多分社長の死とやりたかった事は関係ないぜ」
春風は呆れた顔をした。

「馬鹿馬鹿しい。関係ない筈無いでしょう!あなたと契約した日に社長は死んだんですよ!?それに、社長は、あなたの話が本当なら『時間が無い』からあなたに依頼したんですよ!？」

夏川は困った顔で静止した。

「分かった!一から説明しよう」

「まずな。社長は自分に残された命があと1日程度しか無かったとは知らなかったはずだ」

「どうして」

「社長は色んな奴にあの悪戯をしてたからだ。一人に最低二日はかかるからな」

夏川が笑った。

対して春風はイラついているようだ。

「そんなの一日で一遍にやっただですよ!」

夏川は一度深呼吸して、一気に言った。

「いや、無理だ。社長が本気で条件に見合う奴を見つけようとしたなら、夜に大金の入った財布を落として、翌日の早朝にそいつが来るか待つはずなんだ。社長は数百万は使ったと言っていた。俺の拾

って財布には約七十万入っていた。数百を五百万と仮定すると全部で七回。とすると、一人につき二日だから2×7＝14日で二週間だ。少なくともそれだけの時間はあったんだ。なのにそれを無駄にした。後少ししか時間の無い人間の過ごし方じゃないだろ」

「…そもそも本気じゃなかったのかも…」

「社長は現実には死んでるんだ！？社長が自分の近い死を知ってたなら、こんな遊びなんてしない。だから、社長がそれを知ってた筈が無いんだ！」

少しずつ、夏川の推理が組み上げられる。

「…社長は何をしたかったんですか？」

「外に行こうぜ。その方が説明しやすい」

「ここの花、綺麗だよな」

夏川が言った。

「そんな無駄な事よりも早く社長の事を教えて下さい」

「あんたはここの花は好きか？」

夏川は無視してまた聞いた。

「だから…！」

「必要な事なんだ」

夏川が強く言う。

春風がたじろぐ。

「…好きです」

「それは良かった。自分の推理に自信が持てた」

「まず、社長のやりたかった事だけど…これは恐らく時間のかかる事だったんだろうな」

「なんでそう思ったんですか」

「社長が誰かに、見ず知らずの俺に頼んだからさ。普通は自分のやりたいことを他人にやらせない。俺に頼んだのは万が一自分がそれをやり切る前に死んだ場合に備えての不本意ながらの策だ。社長はその為に金は惜しまなかった。自分が死んだ後の後の時間を買えるなら安いと思っただのかもしれない」

「ちよつと待つて下さい！それはあなたに頼む理由になつてません！社長の部下や幹部、私だつて…」

「幹部の年齢は社長と殆ど同じだろ。死後の保険にならない。次に部下だが、その前にまた質問だ」

「何ですか」

春風はもう彼を止めなかった。

「社長の部下には、彼に似ている奴はいたか？」

「…性格の話ですか？」

「誰がここで見た目の話を出すよ！」

「なら、いませんでした。あなたが一番近いと思います」

「それだ」

「？」

「それが俺に頼んだ理由だ。自分のやりたかった事を自分でやりきつた場合に出来る限り近づける為だ」

春風は更に強く、夏川と社長が似ていると感じた。

どうして、ほんの一度話しただけの人間の考え方がここまで分かるのか不思議だった。

「社長にとって、あなたは身代わりだったんですね…。だから私には頼まなかったのか」

「それは違うな」

「え！？だつて私も社長とは全然似てませんよ！」

「あんたに関しては理由が別なんだ」

「え!？」

春風は驚いた。

「じゃあ、私が仕事を頼まれなかった理由は」

「そう言えばまだ花に水をやってなかったな。さっさとやっちゃおうぜ」

「いや、それより」

「これに必要なだからさ」

夏川が言う。

そう言えば社長もそんな事を言ってた気がする。

「二度目ですよ!？そこに花は…」

「そう。これは社長もやってた事だが…俺はもう二度とやらないようにしようと思った。それくらいあんに怒られるのは嫌だ」

「分かってるならなんで…」

「そう。なんで社長は毎回やってたんだろうな」

「…あ」

「あんたは嫌がらせと言ったが俺は違うと思う。あんたの怒られるの恐れもん。それにあの社長は悪戯は好きだが嫌がらせはしないと思う」 「あなたに似てるから？」

「それも有るが…社長の金に戻ってきてないからってのが本当の理由だ」

「お金って…あの悪戯のお金ですか？なんでそれが理由になるんですか？」

「金は社長がわざと落としたんだぞ。それが帰ってこなくて、通報して取り返すなんてただの嫌がらせだろ。それをやれるのにしなかったって事は社長は悪戯は好きだけど嫌がらせは好きじゃないって事さ」

「じゃあ何で私には…」

「あんたに、あそこにある物を見て欲しかったんだろ」

「え？あそこに何かあるんですか？」

「確認はしてないけど多分な。それ以外にあんたを怒らせる理由が無い。そしてそれがあんたに頼まなかった理由であり、社長のやりたかった事だ」

「…見てくる前にあなたの答を聞かせて下さい」

「社長は楽しい事は無駄な事じゃないと思っていた。だからゲームを作っていた。彼は無駄な事なんかしないんだ。このガーデニングにも意味はある」

「自分が楽しむ為？」

「半分正解だ。自分とあんたが楽しむ為だ」

「私が…？」

「そう。あんたも楽しむ為。だから多分あそこには、あんたと同じ名前の、社長とあんたの桜がある筈だ」

「桜を私に見せたかったんですね…」

春風は夏川に言われた場所を見た。

確かに何かの苗があった。

恐らくは桜だろう。

「…ありがとうございます。これは約束の小切手です」

「いや、まだ受け取れない」

「え？」

「社長がやりたかった事はあんたに桜を見せる事じゃない。あんたと桜を育てて、そしてそれを見ることだ」

「じゃあ…」

「そう。まだ仕事は終わってない。取り敢えず、これから桜は育てるよ」

春風はクスツと笑った。

「何だよお」

「だって…黙ってればお金貰えたのに…」

「い…良いんだよ！ たったこれだけの時間とその小切手が釣り合う方がおかしいんだ！」

「フフツ。そうですね。夏川さん」

春風が楽しそうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1207ba/>

金と時間の天秤

2012年1月5日19時48分発行